



## 4月の幼稚園から5月の幼稚園へ

園長 笛木 哲

新しい出会い、新しい環境…と緊張が続いた1ヶ月でした。子どもにとって最大の教育環境である担任との関係性も、保育経験の違いや昨年度の担任との比較（声かけや保育姿勢）等から、信頼関係を結ぶに至っていない子もいることでしょう。ゴールデンウィークで気持ちをリセットし、幼稚園への期待を高めてくれているといいなと願っています。でも、大好きなお家の人とたくさんの幸せな時間を過ごしたから、登園をしぶる子も出てきます。多くの子どもがこの時期、「幼稚園に行きたくない」「幼稚園なんか嫌い」といった言葉を口にします。でもそれはほんの一瞬のこと。永遠に続くわけではありません。楽しい事が見つければ、子どもは園生活を再び楽しむようになります。お子さんの言葉で親御さんが不安になると、お子さんはますます不安になります。お子さんの不安が消えない場合や要望がある時には、早めに「子どもが不安定になっている」という事実を幼稚園までお伝えください。

イヤイヤが続くようでしたら、「幼稚園がイヤなの。『いやいやえん』に行ってみようか？」と中川李枝子さんの名作『いやいやえん』（福音館書店）を読み聞かせしてみたらいかがでしょう。園長に声を掛けていただければ、お貸しします。



## 令和4年度に取り組む3つの教育目標

本年度は、『きらきらくどの子ども輝き 笑顔いっぱい』とねっ子』を育てることを目標に保育を進めます。年度当初お話ししたお母さんから、「マスクをしていても○△先生の笑顔が伝わってきます」「遠いバスの中から○□先生の笑顔が見え安心します」と、職員の笑顔を褒めていただきました。保育者の笑顔は子どもたちにも、保護者の皆様にも安心感を与え、時には気持ちまで元気にします。そして、子どもたちも幼稚園で自分らしく自信を持って生き、自己実現できる場があれば、当然、笑顔が増えます。

変化の激しい社会を心豊かに、たくましく生きていくために、「自らの頭で考え、行動できる自立した人間」（文科省）が求められています。「できないから人任せにする」「失敗しても自分の非を認めない」という子ではなく、『主体的に生きる子（自分の意思・判断で行動しようとする子）』を意図的に育てることも本年度の目標です。さっそく年長の担任が、「A君の良さを生かした係を任せることで自信をもたせ、主体的に生きる子に育てたい」と係決めを行いました。でも、担任が係を押しつけたのでは、主体的な子には育ちません。そんな時奇跡が起きました。担任が任せたいと思う係に、A君は自ら手をあげました。担任の願いと子どもの思いが響き合った瞬間です。自分で決めた仕事をA君は責任をもって行い、その姿を担任は目を細めて応援しています。

★尿検査の変更 5月25日(水)配布、5月26日(木)回収となります。

裏面に続く

挨拶は、日常生活に欠かせない「人と人が気持ちよく生活するための(魔法の)言葉」です。年度末の保護者アンケート「お子さんはあいさつができますか」という質問で毎年、ワースト3に入る本園の課題です。先週、健康観察表を各クラスに配っていると、年中児3名が、「園長先生、ぼくにもやらせて」と配るのを手伝ってくれました。3名は、教室に入るたびに「おはよう」と挨拶をして健康観察表を届けてくれました。また、毎朝、テラスで出会った職員に「おはようございます」と挨拶を欠かさない子がいます。少しずつ、当たり前にあいさつのできる子が増えています。本年度も「あいさつのできる子」を育てることが目標です。

## 新しい取り組み

昨年度、本園ではSDGsの研修を行いました。その中で、男女の性差による偏見をなくすための一つの取り組みとして、本年度から「男女混合名簿」にすることに決めました。4月の朝日新聞に右のような投書が載り、「男子が先の刷り込みに配慮を〜男女混合出席簿の導入進む 首都圏の小学校は9割超え 中学は25%が男女別〜」という記事を見つけました。これまで幼稚園では、名簿は男女別で男が先、男は青で女は赤、男は自動車で女は人形…というように、大人の価値観を知らぬ間に子どもたち

ちに植え付けてきたことに気づきました。ジェンダー平等への取り組みは始まったばかりですが、何よりも私たち大人の中にある(目に見えない)固定化された価値観を崩していかなければなりません。

## 子どもから学ぶたくさんのこと

アドラーは「大人が上で子どもが下」という人間関係を否定し、「あらゆる人間関係は対等」であるべきと述べています。大人が子どもよりも知識や経験が豊富なのは当たり前です。しかし、それは大人が先に生まれたというだけであって、人間としてはあくまでも対等です。子どもは子どもという固有な価値観をもって、子どもの時間を生きていると私も思います。事実、右上の粘土作品は、朝の30分間で作り上げました。春休み中に47都道府県の全ての名前とかたちを覚えてしまった子がいます。私は神経衰弱で子どもに一度も勝てません。大人は、子どもへの敬意を忘れてはなりません。

## 男子と女子 安易に分けないで

大学生 井上 未葉

(東京都 21)

アルバイト先の学習塾で使用する算教や数学のテキストに、「男子と女子の人数を求めさせる問題がとても多いことに気が付いた。男女の二分法は計算問題で都合がよいように、人数がXとYで表される定番である。「多様性」について、制服を巡る議論は盛り上がりつつあるが、他の点ではどうなのだろう。男女で分けられると悪いこと、そもそも性別を、公共の場である学校で分類の基準に用いること……。

3年前に卒業した高校では、出席番号は男子の後ろに女子が続いた。制服、かばん、髪形、全てにおいて男女別の規定があった。先生は「女子も人手伝って」「雑巾がけは男子で」「などと言っていた。学校は性別で分けるのが好きだ。分ける必要のない時、他の分け方でも良さそうない時、楽だからか、性別が用いられる。例えば誕生日などではだめなのか。性別は「わかりやすい」「変わらない」と思われているのか。この上なくプライベートな問題なのだが、身体が、外側から支配されるのに、あらいたい。学校は、いま一度、分け方を見直してほしい。そうしないと、生徒たちは自らを内側から縛り付けてしまうだろう。



♪今月の歌♪『ぶんぶんぶん』 ご家庭でお子さんと一緒に歌ってみませんか♪♪♪